

第5章 キャリア教育における「卒業生の体験発表会」の意義

1. 異校種間連携と卒業生との交流

発達段階に応じた継続的かつ体系的なキャリア教育を実現し、児童生徒の学校間の移行に連続性をもたせるための方策の一つとして、異校種間連携がある。連携の効果には、生徒に対する効果と学校・教職員に対する効果があるが、前者については「進学する学校についての情報を収集することで、不安が解消され、新しい生活環境に対して円滑に適応」できること、「将来についての視野が広がり、学習意欲の向上や生活全般の向上につながる」こと、年長者と「交流をもつことでよりよい育成につながる」ことなどが期待されている（注1）。

実際、「キャリア教育・進路指導に関する総合的実態調査」（以下「総合的実態調査」）の「中学校調査」の結果によると、「高等学校等の体験入学や学校紹介など、上級学校に関わる体験活動を取り入れること」を重視してキャリア教育の計画を立てている中学校は75.2%であり、実際に何らかの形で「高等学校などの上級学校」と連携している中学校も69.3%に達する。一方で、取組内容によって差が見られることも事実である。すなわち、「高等学校など上級学校への訪問や見学、体験入学、学校説明会」を実施しているのは97.3%、「高等学校など上級学校の関係者を招いて行う学校説明会」を実施しているのは76.8%であるのに対して、「卒業生（高校生など）による体験発表会」を実施しているのは、わずか30.4%にすぎない。「社会人による生き方や進路に関する講話・講演」の実施が68.2%であることを考えると、先輩と対話する機会よりも、比較的年齢の離れた職業人による講話が優先されている状況である。

しかしながら、「総合的実態調査」の「中学校・卒業者調査」によると、「将来の生き方や進路について考えるために実施してほしい体験活動」として、「卒業生の体験発表会」は26.7%と第2位を占めており、「社会人や職業人の講演・講話」（17.9%）や「高等学校など上級学校の先生の講話・講演」（14.9%）よりも高くなっている。なお、ここでいう「卒業生」がどのような年齢であるかは定かではないが、「社会人」が別の選択肢として設定されていることを考えると、高校生あるいは大学生が中心であると考えられる。以下では、中学生が卒業生（先輩）との交流を通じて何を望んでいるか、詳しく分析する。

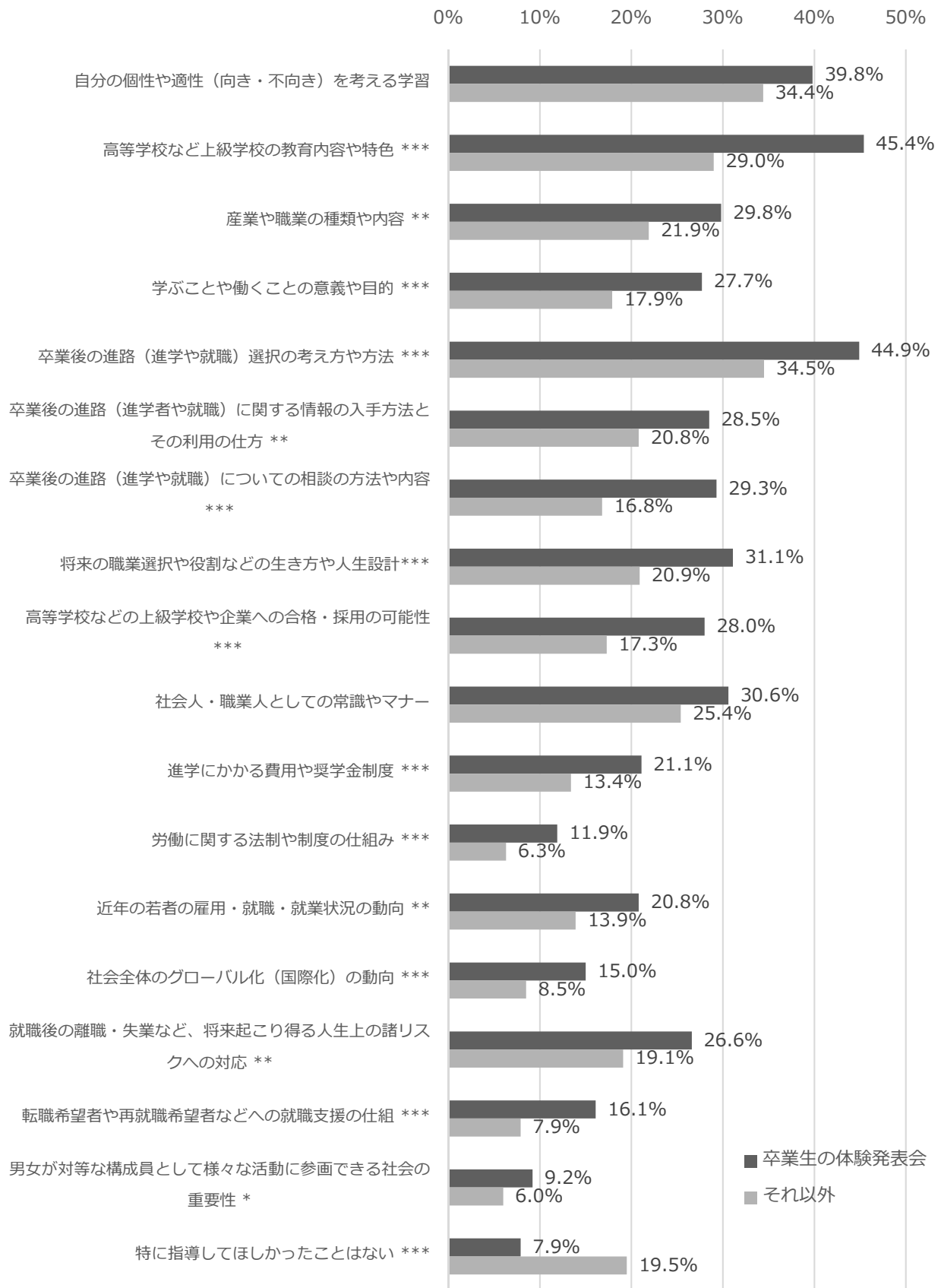
2. 「卒業生の体験発表会」に関する分析

まず、「中学校・卒業者調査」における「将来の生き方や進路について考えるために指導してほしいこと」について、「卒業生の体験発表会」を実施してほしいと回答した者と「それ以外」の比較を行った（図1）。前者は後者に比べて、「高等学校など上級学校の教育内容や特色」（16.4ポイント差）、「卒業後の進路（進学や就職）についての相談の方法や内容」（12.5ポイント差）、「高等学校などの上級学校や企業への合格・採用の可能性」（10.7ポイント差）、「卒業後の進路（進学や就職）選択の考え方や方法」（10.4ポイント差）、「将来の職業選択や役割などの生き方や人生設計」（10.2ポイント差）など多くの項目で、指導を望む者の割合が高くなっている。

ただし、こうした指導が得られる体験活動は、「卒業生の体験発表会」だけではないと考えられる。そこで、先の比較でポイント差の大きかった上位5項目について、「高等学校な

ど上級学校への訪問や見学，体験入学，学校説明会」及び「社会人や職業人の講演・講話」の希望者との比較を行った（図2）。3者の中で，「卒業生の体験発表会」の希望者が最も高かった項目はなかった。一方で，「高等学校など上級学校への訪問や見学，体験入学，学校説明会」の希望者は，「高等学校など上級学校の教育内容や特色」（53.4%）や「高等学校などの上級学校や企業への合格・採用の可能性」（35.4%）の割合が最も高く，また「社会人や職業人の講演・講話」の希望者は「将来の職業選択や役割などの生き方や人生設計」（37.9%）の割合が最も高い結果となった。

したがって，「卒業生の体験発表会」に対するニーズは，進路情報を入手することだけにとどまるものではない。例えば，上級学校に関する知識を獲得するだけであれば，上級学校訪問や体験入学等で代替可能な場合もあるし，社会人としてのマナーを知るだけであれば，職業人の講話の方が効果的である場合もある。そうではなく，飽くまで同じ学校出身の「卒業生」との交流を通して生き方を考えることに，この活動の意義があると思われる。



*** p<.001 ** p<.01 * p<.05

図1 「卒業生の体験発表会」を希望する卒業生が「将来の生き方や進路について考えるために指導してほしかったこと」

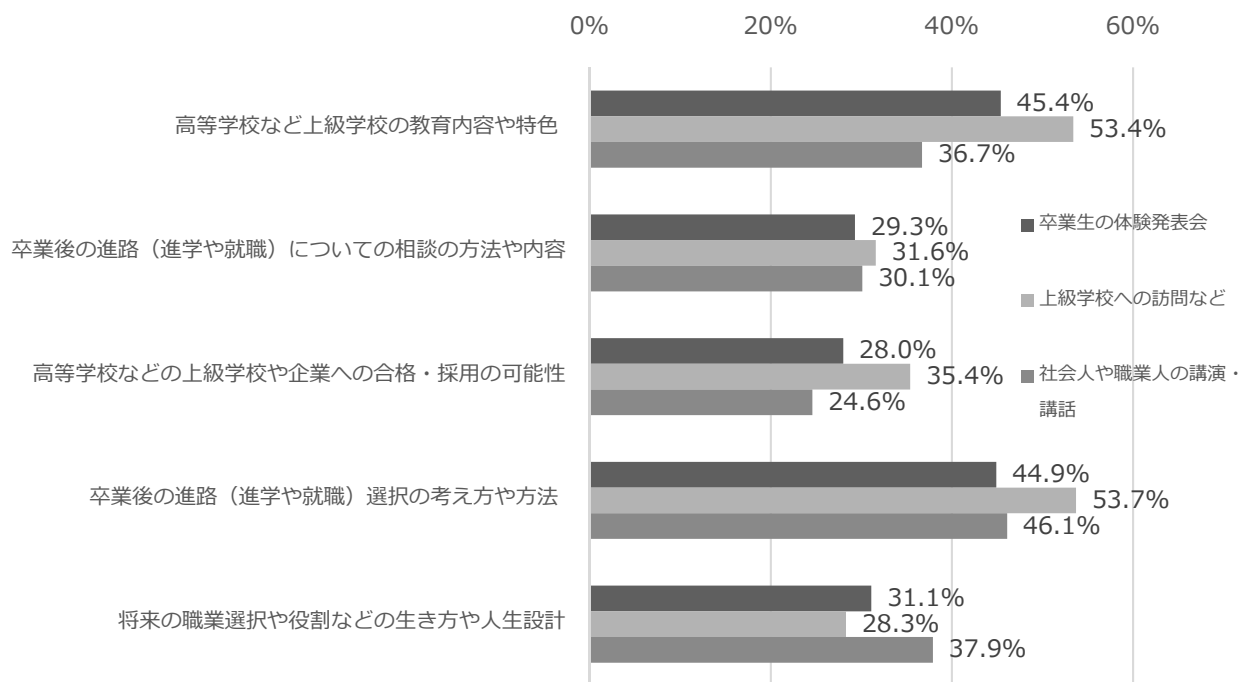


図2 「将来の生き方や進路について考えるために指導してほしかったこと」についての3者間比較

3. 分析結果から示唆される課題と可能性

分析の結果からは、子供たちは年齢の離れた上級学校教員や社会人（職業人）の講話だけでなく、比較的年齢が近い卒業生とのコミュニケーションを望んでいることが示唆される。生徒にとって、同じ中学校出身の先輩は自分たちと類似の経験をしており、生きた情報を提供してくれるため^(注2)、キャリアモデルになりやすい。すなわち、上級学校の教育内容や特色、卒業後の進路についての相談の方法と内容、上級学校や企業への合格・採用の可能性、卒業後の進路選択の考え方や方法、生き方や人生設計、などについて卒業生から学ぶことで、それを効果的に内面化できるのではないだろうか。特に高校生を招く場合、中学生と在学期間中が重なっている「顔見知り」の卒業生（例えば、中学校3年生を対象に実施する場合、高等学校1年生ないしは2年生）に依頼することで、親近感がより一層高まる可能性もある。既に69.3%の学校が「高等学校などの上級学校」と連携していることを考えると、この連携の一つとして「卒業生の体験発表会」を実施するハードルはそう高くないと推察される上に、今後更なる質的充実も期待できる。

最後に、体験発表会の在り方について若干の提案を試みたい^(注3)。まず、生徒からみて魅力的なモデルというのは、個々人の特質や人間関係によって異なる。さらに、生徒にとって適切なキャリアモデルは、本人がどのような進路や生き方を志向しているかにもかかわっており、極めて多様であろう。したがって、体験発表する卒業生を選択する際には、生徒集団の特性やニーズを踏まえることが重要である。可能ならば、場合によっては進路等の異なる複数人に依頼し、幾つかのパターンを用意することも考えられるであろう。生徒は特定の一人をモデルとすることは決して多くはないだろう。多くの場合、複数の人間の様々な側面から影響を受けつつ、自分なりのビジョンを作り上げていくものと考えられる。その点からも、可能なかぎり、様々なモデルに触れる機会があることが望ましい。

さらに、事前と事後の学習も体験発表会の効果を高める^(注4)。体験前には、発表のどの部分に注意すべきかを生徒に意識させておく必要がある。また体験後には、振り返りの時間を設定し、体験の内容とそれを受けての思考過程を言語化することで、記憶を長期間にわたって保持することができる。

2011年に高校生を対象に行われたとある調査では、高校生の約7割が「目指している人やあこがれている人がいない」と回答している^(注5)。こうした状況にあって、中学生が身近な先輩を手掛かりにキャリアモデルを作り上げていくことの意義は小さくないであろう。モデルとなる目標としての人物がいることで、自己のキャリアに見通しをもつことができ、ひいては進路選択に向けた意欲を高めることにもつながるのではないだろうか。

(注1) 文部科学省 2011『中学校 キャリア教育推進の手引』教育出版。

(注2) このような類似した立場の人による支援は、「ピア・サポート」と呼ばれる。それは、「一般に、同じような経験をした人はよりよい関係を結ぶことができ、結果的により確実な共感や妥当な対応を提供できるとの事実」によって定義され、「同様の経験をした人たちは、互いに、専門家には提供できない、思いもよらない実地的な助言や示唆を与え合うことができる」とされる (Mead & MacNeil 2006 “Peer Support: What Makes It Unique?”, *International Journal of Psychosocial Rehabilitation*, 10 (2), pp.29-37)。

(注3) これらの提案は、Albert Bandura のモデリング理論から示唆を得ている (A.バンデューラ 1979『社会的学習理論』(原野広太郎監訳) 金子書房)。

(注4) 「卒業生の体験発表会」を直接取り扱っているわけではないが、体験活動による成長・変容と事前指導・事後指導の関係性については、次章の第6章で取り扱っている。

(注5) リクルート 2012『Career Guidance』No.40